
D N A

† 李陽 †

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DNA

【Zコード】

N2605BA

【作者名】

十李陽十

【あらすじ】

田舎過ぎず都会でも無い町に住んでいる高校一年生の高橋 隼人。夏休みの始め、バイトが終了して家に持つて帰った余り物の弁当を食べようとしたところ。

稻妻と共にボロアパートの天井を突き破つて一人の少女が降つてくる。銀髪、赤眼をした美少女だ。混乱する隼人に構うこと無く、強烈な一言を放つ少女。

「あなたの遺伝子を貰いにきました」

生殖遺伝子を採取する為に現れた、平行世界の地球人だというのだ。

クラスのアイドルに一途な思いを抱いていた隼人は、頑なに拒否する。

しかし少女も泣き落としを使って隼人を追い詰めた。

最終的に警察へ届けるわけにもいかないと判断した隼人は、しぶしぶ部屋に住んで良いことを了承する。

「俺をホレさせてみせろよ！ そしたら……くれてやるよ……俺の遺伝子……」

平行世界人と奇妙な同棲生活が幕を開ける。

第 1 話 不幸体质<Unhappy Attractor>

田舎では無い、かと言つて都会かと言つと全然そんなことは無い。少し大きめのターミナル駅があり、駅前にはバスター・ミナルがある。でも、駅には駅ビルがある訳では無くて、少し大きめのスーパー・マーケットがあるだけだ。

そんな町に住んでいる高校二年生の高橋隼人たかはし はやと 16歳。顔もブサイクでは無いが、取り立てて男前という訳でも無いし、身長も日本人男性平均の一七二センチ、体格は引き締まっているが、ムキムキという訳ではない。はつきり言えば普通というジャンルに入る男だ。そんなこの中途半端な町から在来線で一駅ほど上ったところにある県立高校に通つてゐる。

家族構成は両親との三人家族だつたが、事故で他界してしまい今は一人である。隼人は、両親が死んだのは自分の所為では無いか？そんな風に考えていた。もちろん、自分が直接関わつて両親が事故に合つた訳では無い。そんな考えに到つた理由というのは、隼人が生まれながらに持つてゐる不幸体质アンハッピー・アトラクターによる物だ。

小さい頃から、遠足の日になると前夜食べた物にアレルギー反応、又は食中りを起こして遠足には参加出来なかつたり、国際的テロが発生して遠足その物が中止になつたりした。洩れなく貰えるというキャンペーンに応募しても貰えない事すらある。

そんな不幸な隼人にも他の人と等しく訪れる幸福という物がある。今日は終業式、明日からは夏休みなのだ。何度追い払つても現れる、隼人の寝室の網戸に止まる蝉が奏でる鳴き声びきごゑも、今日ばかりは夏らしくて良いとさえ感じさせられてしまつから不思議である。もちろん、夏だから、夏休みだからと隼人に幸運が訪れる訳では無いし、一夏のアバンチュールがあるとも思えない。ただ、高校生らしく長い休みがあるというだけで幸せに感じてしまつのだ。

隼人は本日の予定を確認する。

(今日は……終業式が午前中で終了。一三時には帰宅出来る。午後は……一五時から弁当屋のバイト。夜の二一時に終了予定と)

終業式からバイト開始までの時間が微妙に、といふか中途半端に空いている。何かしたいような気がするけど、何も出来ない、そんな中途半端な時間だ。こんなことも隼人にとってみれば日常茶飯事だ。その微妙な時間については、学校に少し残つて、恐らく配られるであろう、夏休みの宿題を進めて、バイトの時間に合わせて学校を出れば万事問題無い。

隼人は、中学時代からの癖で付けていた手帳を確認した後閉じると、制服のお尻にある左ポケットに突っ込む。隼人はお尻の右ポケットに長財布、左ポケットに手帳。そして、前ポケットの右に鍵を入れるのが習慣だ。

元栓、蛇口、窓の戸締り、ボイラーハンガーの電源、部屋の電気、電源プラグ全てを指差し確認でチェックしていくと、スポーツシューズを突っ掛けて外に出る。部屋のカギを掛けた後、指差し確認でチェックすると、学校に向かうのだ。隼人は自らの不幸体質を過小評価はしない。何か小さな切っ掛けでも残そう物なら、いつ牙を剥くか分からないのだ。

隼人は、自転車置き場で三重力ギを付けた中古購入の四代目ママチャリのパンク確認を手早く済ませると、それに跨つて駅へと向かう。もちろん、途中でも細心の注意を払つてだ。隼人の敵は、ある意味アメリカの特殊部隊など目じやない程の強敵である。ヘタすると空を飛ぶ天道虫すら死に直結する程の脅威になりかねないのだ。ただ、殺伐とした雰囲気をばら撒きながら登校できるほど非常識では無い。あくまで意識だけを注意に払い、見た目には到つて普通に見せる。その技を身につけるまでは、殺氣立つた視線を周囲にバラ撒いていた所為で、外を歩けば不良に絡まれるなんていうのは、

もはや日常だつた。最初は謝つて許して貰つていたが、性質が悪い中にもピンからキリまでいる。中には問答無用で手を出してくる者もいるのだ。中学一年の時に、殴りかかられた際防衛するために上げた手の肘が相手の顎先にクリーンヒットし、それ以降は謝つてダメな際は撃退する必要が出てしまつた。そして、撃退した数が増えて行くと、今度は挑んでくる者まで出てくる。それに関しては謝つて許して貰うと言つ選択肢が、そもそも存在しないので益々撃退数は増加して行つた。気付くと周囲では有名な不良の中にラインナップされてしまつていて、なんとも不幸である。

そんな事があつた所為で、成績や学校での態度が良かつたにも関わらず、推薦入試が出来なかつた。仕方なく、近くでも一番まともな県立高校を受験して合格を勝ち取つたのである。

あの時は大変だつた……等と考えながら、改札口を無事に通過、何事も無く電車に乗り込んだ。

(オカシイ……こんなに何も無い朝は初めてじゃないか?)

隼人が、そんな疑問を浮かべ今以上の注意を払いながら学校に辿り着くも、やはり何も起こらない平和な登校で終わつた。もしかしたら、終業式や下校で起こるかもしれない。しかも、朝起こらなかつた不幸が上乗せされた物が来る可能性すらある。そんな考えから、周囲にも分かる程の殺氣立つたオーラを放しながら終業式を無事に終えて、ついに最後のホームルームまで辿り着いた。

(まさか……このまま何も起こらないなんて事があるんじゃ……)

隼人の心配とは裏腹に何事もなく終了するホームルーム。クラスメイトが置き勉していた教科書類をカバンの限界に挑戦するようにパンパンに押し詰めて帰つていいくのを尻目に、バイトの時間まで中途半端に空いた時間を甲子園を目指して練習する弱小野球部でも眺

めながら夏休みの宿題を進めようかと教科書を開く、すでに帰宅の途に付いたはずの前席の椅子が引かれた。

何か忘れ物でもしたのだろうか？ それとも遂に一発目の不幸がやってきたのか？ そんなことを考えながら視線を教科書から上げると、隼人の目に映つたのは有り得ない光景だつた。

なんとクラスで一番人気、いや……学年でも五本の指に入るほどの人気を誇る上野菜緒うえの なえが目の前に座つていたのだ。こげ茶に染めたセミロングの髪の一部をちょっとだけ縛つてアホ毛のような毛束を作つた髪型。色白で背も少し低め、おそらく一五〇センチ弱。全体的に線が細いのに、しつかりと主張する胸。ナチュラルメイクでもしつかり自己主張する目はしつかりとした二重だ。そんな上野菜緒が隼人の眼の前に座つている。しかも、周囲を見渡してみると、廊下でこちらを伺いながら内緒話をしている上野菜緒の友人数名がいるだけで、教室自体には隼人と菜緒を除いて誰もいないのだ。隼人が意を決したように生唾を飲み込んでから声を掛ける。

「ど、どうしたの上野さん」

ドモつた。自分で考えていた以上に隼人は緊張していたようだ。薄く頬を桃色に染めたまま、若干の間を置く上野に隼人の期待が最高潮を迎える。

上野が少し潤んだ瞳を上げて上目遣いのまま、ナチュラルメイクにも関わらず艶のある唇を静かに開く。

「夏休み、なんだけどさ……さつき、私の仲が良い友達三人と、クラスの祐次君、高木君の五人で海に行くことになつてね。あと一人男の子欲しいよね~って話しになつてさ、隼人君夏休みつて暇ある？ 一緒に行かない？」

隼人は万歳三唱でもしたい気分になつた。こんな気持ちは、サツ

カ一日本代表がブラジルを倒した瞬間をテレビで見ていた時以来のことだ。

そんな気持ちをオブラーートで包んだ上に和紙で更にデコレーション、ついでに漆まで縫つて光沢を出した後、胸の奥に仕舞いこみ、徐にお尻の左ポケットから手帳を取り出す。

「何日？　日程は決まってるの？」

よし、今度はドモらずに話すことが出来た。上手く平静を装つことが出来たと、心の中で盛大な溜息を吐きだした。

輝くような笑顔を浮かべて、携帯電話を取り出す上野、それを見た隼人は内心で『あぢやー……』と思っていた。

「隼人君、携帯電話持ってるよね？　日程決まつたら連絡するから番号とメアド交換しよ！？」

「ゴメン、携帯持つてないんだ……」

まさか、こんな”えげつない”方法で来るのは、甘く見ていたよ
アンハッピー・アトラクタ不幸体质。隼人が内心、泣きながら、だけど表には出さず苦笑いを浮かべると、何故か上野が少し泣きそうな顔をしていた。

「ど、どうしたの！？」

「私に、番号教えたくないの？」

そう、今日^{きょう}、小学生すら携帯電話を持つてる時代である。高校一年生にもなつて、携帯電話を所持していないというのは、今時珍しいのだ。

そんなことよりも、今は上野が泣きそうな顔をしていることの方が、隼人にとっては大問題だ。直ちに対応する必要がある。しかし、悲しいかな本当に携帯電話は持つてないのだ。

「う、上野さん！？ 本当に携帯持つてないんだ。俺の家つて一人暮らして生活費とか、自分でやりくりしてるから、携帯電話の基本料金さえ出費はキツくてさ！」

上野の表情がみるみる明るくなる。最終的には、またキラキラ輝くような笑顔に戻っている。いや、心なしか先ほどよりも輝いて見えているのは、隼人の眼が勝手に付けているエフェクトなのかと言えば、それはちょっと違うようである。

「隼人君つて高校生なのに一人暮らしなの！？」

一般的に地元の高校に通う色が強いこの中途半端に田舎な地域は、高校進学の為に一人暮らすするような人は多く無い。もし、親元を離れて暮らすとなれば、それは全寮制に入ることを意味している。それくらい考え方方が古い地域なのである。そこに、一人暮らしをしている高校生が一人入ると、途端に溜まり場扱いされるのは目に見て明らかだ。そんな理由から”一人暮らし”ということを秘密にしていたのだが、まさかこんなに早く切り札を切ることになるとは、隼人は考えていなかつた。

「ああ～……うん。皆には内緒だよ？」
「内緒……うん！ 一人だけの秘密ね！」

上野の表情が眩しい。隼人には太陽に虫眼鏡を向けたように眩い光が降り注いでいるかのように感じていた。

「でも、そしたら……予定が決まつても連絡取れないね……」
「ああ～……うん。仕方ない」

隼人は手元にあつたノートの一部を切り取ると、ボールペンで住所を書き込んでいく。手元が明るく感じたのは気の所為ということにしておこう。隼人は、気持ち急いで住所を書き上げると、裏面に簡単な地図を描き入れて上野に渡した。

「これも、皆には内緒でよろしく。日程が決まつたら、手紙でも出してよ」

「内緒ね！ 大丈夫よ！ じゃあ日程が決まつたら、教えに行くね！」

「いや、手紙で」

「なんだか今年の夏は楽しくなりそう！ じゃあ、友達待たせてるから！ またね！ 隼人君！！」

隼人は静止を呼び掛けるべく出した右手を静かに下ろすしかなかつた。遠くで、『どうだつた？ どうだつた！？』『一緒に行つてくれるつてさ！』『携帯番号はゲットしたの！？』『それは……内緒！』『ズルイんだけど！ 私にも教えてよ！』『ダメ！ だつて二人だけの秘密 だもん！』『意味深だね～』という内容が聞こえて来たような気がしたと同時に、隼人は自らのスルースキルがレベルアップした幻聴を聞いたような気がした。

なんだか一気に疲れた気がしたが、一応当初の通り、一時間ほど夏休みの宿題を進めると、バイト先に足を向けた。

バイト中も特に不幸は発生しなかつた。いつもであれば、店の今までカラスが入り込んで、作りたての唐揚げを攫つていくこともあるのだが、さつきのような一見すると幸せな不幸というトラップもあるから気を引き締める必要があると、隼人は心を引き締めていた。高校生が許されている時間のギリギリまで働いた隼人は、このバイト特有の特権である賄いまかないを食べる時間も無い代わりに、少し冷めてしまつた売れ残りの弁当を最大三つまで持ち帰つて良いというルールを行使すべく冷めた弁当ラインナップに視線を落としていた。

もちろん隼人は三つ持ち帰る。鍛えこまれた嗅覚で持つて、一番状態が良い物を選ぶ、本日は、この店で売れ筋のナンバーワンのハンバーグ弁当、ナンバーツーの唐揚げ弁当、そして隼人の大好きな山菜おこわ弁当の三つだ。

これは、後で大きなしつペ返しが来ると、こころを引き締めながら帰路に付くも、何事も無く自宅へと辿り着いた。着くなり、窓を開けて籠った空気を追い出すと、制服をハンガーに掛けて、タンクトップにハーフパンツという格好に着替える。

きっとたまには神様も俺の様な不幸体質アンハッピー・アトラクタに休息をくれるのかな？などと考えながら、部屋の真ん中にある”ちゃぶ台”へ弁当を広げた。

手を合わせて『『いただきます』』を言おうと口を開いたその時、開けていた窓から強めの風が吹き込んでくる。外で雷雨を伴う大雨が通りかかったのだろうか。そんなことを考えながら、窓を閉じようと立ちあがり、窓に手を掛けた瞬間、眩しい光と共に大きな稻妻の音が響いた。

少し送れるように響く振動。明らかに自分の真後ろに大きな力を持つた何かが、物理的破壊を伴つて、隼人の弁当を粉々にしたこと

が窺えた。咄嗟のことで何も出来ずに外を見たまま佇む隼人。

まさか、油断した瞬間にこんな仕打ちとは、部屋に雷が落ちるなんて有り得ない。それでも死ななかつたというのは、むしろ幸運なのか？自分でも答えが出ないような、半ば自らを慰めるような思考に浸りながら、振り返った隼人の目には信じられない物が映つていた。

大きくはないシルエット。透けるように白い肌。銀色で長い真つ直ぐの髪。大きく少し釣り上がった目。長いまつ毛。真っ赤な瞳。近未来映画に出て来そうな布の少ない服。スレンダーな手足。自己主張しすぎない胸。見たことも無い機械。それらで構成された、一種の神々しささえ感じる少女を最後に彩るのは、少し幼くも見える

が整つた顔立ち。誰が見ても同じように評価するだろつ。『美少女だ』と。

その『美少女』が、ゆっくりと立ちあがる。天井こそ大穴が開いているものの、弁当は全て無事、ちゃぶ台も現在土足で踏みにじらされているが形状を保つていて。『美少女』が一步踏み出す。すると、細い四本脚によつて絶妙なバランスを保つていたちゃぶ台が、バランスを失つて引つ繰り返る。宙を舞うさつきまでは奇跡的に無事だった弁当達は、敢え無く床へと落下しゴミ箱へ直行すること間違いない状態へと変貌を遂げた。そして、当然一緒に引つ繰り返つた『美少女』は床に顔面を強打し、沈黙している。

少しの間を伴つて、顔をあげた『美少女』は鼻の頭を赤くしながら、恥ずかしげも無く言い放つた。

「高橋隼人さん、あなたの遺伝子を貰いに来ました」

第1話 不幸体质×Unhappy Attractor（後書き）

1) 置き勉……教科書や参考書などを学校に置いていく習慣の事。基本的に自宅で勉強することが無い人に多く見受けられる。そういう人物は習慣的に宿題もやってこない為、眞面目な友人の助力でもって学校生活を送っている傾向にある。

第2話 平行世界×Parallel World

遺伝子、それは生物が保持する自らの設計図であり、種を保存する為に残すべき情報体である。生物は様々な方法で種の保存に努めてきた。例えば無性生殖、これは単体で子供を増やすのだ、自分と全く同じ性質をもつた個体を作れるということは、最低限の性質を保証できるということである。弱い者が淘汰されていく中で、強い者程たくさん生き残るという考え方の元、自らと同じ個体を作り続けると言う性質がある。対して有性生殖とは、種に多様性を持たせることで、適応力や免疫力を強くし、様々な環境においても種が保存される可能性を高めることを目的として行われる側面がある。この二つの面から見ても、遺伝子は生物を構成する上で、重要な因子なのだ。

隼人の部屋に突如として現れた『美少女』は、隼人にその重要な遺伝子を貰いに来たと言ったのだ。

「もう一度言いますね。高橋隼人さん、あなたの遺伝子を貰いに來ました」

まさか、あの衝撃の一言を一度言わることなど考へてもいなかつた隼人は、二度目の衝撃で逆に少し冷静になることが出来た。少し頭の中を整理しながら、質問を考える。

「ええ～っと……まずは、どこから来たんですか？」

隼人の質問に対し、隼人の目を直視したまま瞬きをすることなく見続けた『美少女』は、少し間をおいてから口を開いた。

「私は、第五並列宇宙太陽系第三惑星地球より参りました」

「第五並列宇宙？　え？　何？」

「第五並列宇宙太陽系第三惑星地球です」

『美少女』の話を、『一』の子、頭大丈夫かな？』と考えた時、不意に見上げた視線の先には天井に穿つた大きな穴。隼人は、仕方なく彼女が言うことを信じてみようとを考えた。

「それじゃあ、ここはどこなの？」

「ここは、高橋隼人さんが高校入学と同時に転居してきた築四七年の古アパートです」

「そうだけど、そうじゃなくて……さつきの第五並列なんとかつて奴で言つた時さ」

「ここは、第一五八〇並列宇宙太陽系第三惑星地球、日本列島、本州、関東平野に位置する埼玉県の、とある築四七年の古アパート、六畳風呂無しシャワーのみ、共同トイレ、一口コンロが標準装備の家賃が月二万八千円という部屋です」

「詳細すぎる内容に涙が出そうだわ……ってか並列宇宙つていっぱいあるんだねえ～、何それオイシイの？つて感じだな。それで？」

君の名前は？」

「？　食したことがありませんので、先の質問には応えられませんが……私の名前は、パパラリット・ストリアヌス・ブルグリアントリッパア・ムヌアティロ・ヴァイヴァブロ・ロクス・リーナ・テレスタです」

「長つ！　長い！　長すぎるよー・舌噛んじゃうよー・面倒だからテレスタって呼ぶよ！」

「えっと……コードネームはリーナです」

「最初からリーナで良いよ……んで、リーナは何をしに来たつて？」「三度目は想定外でした。高橋隼人さん、あなたの遺伝子を貰いにきました」

隼人は、むしろこちらが想定外の連続ですよ、リーナさん。と思っていたが、そんなことよりも前言と同じく『遺伝子を貰いに来たらしい』このリーナという少女に、どう対応した物かと悩んでいた。とりあえず、建設的な意見が思い浮かんだので、隼人は質問してみることにした。

「髪の毛でも切つて渡せば帰つてくれますか？」

「現在、高橋隼人さんが保有する髪の毛に含まれている遺伝子情報量では目的を達成するには量、質ともに不足しています」

隼人は『まさか』と思ひながらも、質問せずにはいられなかつた。

「さ、最善の手段は？」

少し応えにくそうに手をモジモジさせ、少しづつ赤くなる頬に、隼人は『まさか』が『本当』になることを予感していた。

「えつと……生殖活動により、生きた新鮮な遺伝子情報を獲得することでの目的の達成が可能です」

予感が的中した解答に隼人の口は、開いたまま塞がらなかつた。

「それはダメだ！」

「なぜですか？　こちらの座標における生殖活動は盛んに行われています。こちらの第一五八〇並列宇宙太陽系第三惑星地球、日本列島では現在『夏』と呼ばれる動物の活動がピークを迎える季節だと調査結果に出ています。高橋隼人は現在一六歳であり、そういうた行為に対して未経験の者が一番夢を抱いている時期だと調査結果には出ています。こちらの言葉で表すと『一夏の思い出』『一夏のアバンチュール』と称される物です」

「それは！……そうかもしれないが、それでもダメだ！俺には
好きな娘ひとがいるんだ！俺の純潔は、その娘ひとに捧げるんだ！」

今時、珍しいかもしれないが隼人は一途で頑固だった。例え相手
が美少女であろうと、恋心も持たない相手と”そういう事”が出来
ない位に純粋で、馬鹿だった。

隼人の台詞に対して、リーナは驚愕の表情を浮かべて焦り出した。

「ええ！！！ 困りました。隼さんの純潔にて生殖活動を行うこ
とが最低限であり、最高でもある目標なんです！ どうすれば、純
潔を頂くことが出来ますか！？」

縋るように涙を浮かべるリーナを前に冷や汗が止まらない隼人。
隼人が『この娘は正気か？』と考えるのも無理のことだった。
というのも、隼人に拘る必要は無いのだ。隼人の同級生を思い浮
かべてみても、自分より男前や頭が良いヤツなんか沢山いるのだ。
自分が誇れることと言つたら、泣きたくなるほどの不幸体质だけだ。
アンハッピー・アトラクター

「もしかして、これも俺の不幸体质のせいなのか……」

他の純潔男子が聞いたら狂氣を貼り付けた表情で襲いかかって来
そうな発言だつたが、幸いにして幸運、ここには隼人以外には男子
がいない。

「それでは、私に高橋隼人さんとの共同生活をお許し下さい

「なんでそうなる！？」

「高橋隼人さんが現在必要と考えている物は、『恋心』という物で
すよね？それを私に懐いて戴かなくては、目標を達成することが
出来ません！」

「年頃の男女が共同生活なんて！ダメに決まってる！」

「そうですか……」

しょんぼりと頃垂れるリーナ、なんとも哀愁漂う姿である。銀色の髪の毛は、見るからに幸が薄そうで、涙を浮かべる赤い瞳は、まるで宝石のように輝いていた。

「それでは……私はここを出て行くことにします。高橋隼人さんの遺伝子を頂かなくては、私は元の宇宙に戻ることが出来ないので、このまま外に出て、夜道を彷徨い、悪い人に乱暴されたり、食べる物もなくて飢えたり、そして……その内、野垂れ死んでしまうんですね。……うつ……ヒック……ヒック……」

隼人は追い詰められていた。こんな儚げな少女を夜道に放り出すなど、冷静に考えれば出来るわけがない。顔こそ日本人でも銀髪の赤い瞳なんて、ビジュアルロックバンドの追つ駆けくらいの物だろう。それに警察へ届けようにも、何より戸籍もパスポートも何もないのだ、身分を証明することも出来ない。不法入国と言えば不法入国だが、リーナの話によると強制送還については、いくら日本の高い技術力を持つとしても不可能だと思われた。色々な計算が行われた結果、答えは一つしか用意されていないことに気が付いた。

「ここに居て良い……」

小さく呟くように出した声は、近くを通る消防自動車のサイレンの音に飲まれてしまふ程、小さな物だった。

「……ぐすつ……え？」

「だから……ここに居て良いつて言つたんだ！」

「良いのですか？……ヒック……年頃の男女が……ぐすつ……共同生活なんて……っ……ダメに決まってるんですよね？」

「ああ……だけど！ アンタの頼みを聞く訳にいかない！ 僕の家に家政婦として置いてやるだけだ！」

「ええ！！！ それじゃ私、元いた宇宙に帰れないじゃないですか！？」

「！」

「ウルサイ！ ウルサイ！ ウルサア～イ！ ん～……そしたら、アレだ……俺をホレさせてみろよ……」

「え？」

「だから！ 俺をホレさせてみせりよー そしたら……くれてやるよ……俺の遺伝子……」

しばらく呆けていたリーナの目からは涙が引き、勢いのある炎が灯っていた。

「分かりました！ 何としても高橋隼人さんを私にホレさせてみせます！」

「隼人で良い」

「ハイ？」

「だから！ 隼人で良い！ フルネームで呼ぶのは、この辺りでは普通じゃないんだ」

「分かりました！ 隼人！」

「呼び捨てかよ！ ”さん” は付けろよ！」

「ハイ！ さん隼人！」

「わざとやつてんのか！？」

「ひやあ！ すいません、隼人さん！」

一気に疲れた隼人が大きな溜息をつくと、玄関の扉を乱暴にノックする音が部屋に響いた。隼人が覗き穴から来訪者を確認すると、血相を搔いた大家さんだつた。『高橋君！？ 大丈夫かい！？ この部屋に雷が落ちたつて連絡があつたんだけど！』と部屋の外で大きな声で騒いでいる。大家をそのままに窓の外から様子を伺うと、

周囲には野次馬の群れと消防自動車が一台、救急車が一台、パトカーが3台も出張る事件となっていた。

「ヤバイ！ リーナ！ 服脱いで！ 僕の服適当に着て！ その機械は押し入れに突つ込むんだ！」

「ハイ？ どうしたんですか！？」

「良いから早く！ つてか着替えさせるの面倒くせえし！ 時間も無いから！ ……リーナ！ 押し入れに隠れてて！」

隼人は、リーナを抱え上げると押し入れの上の段に乗せ、『絶対出てくるなよ！』と念を押した上で扉を閉めた。普通であれば、下段に隠れてもうつところだが、普段布団を出した状態の上の段は整理する必要もない調度良いスペースが空いていたのだ。

急いで玄関の扉のチャーンロックと鍵を解錠して扉を開けると、マスターキーを構えた大家さんとバールを構えた消防士がいた。

「隼人くん！」

「要救助者を確認！」

「わわっ！ 僕は大丈夫ですから！」

少し血走った目をしていた消防士と大家さんに無事を説明し、安全確認の為に中に入りたいという消防士と、ついでに大家さんには壊れた天井を見て貰う。ボロくて古いアパートだけど、大家さんは基本的にとても良い人なのだ。

「あちやー……こりやー……ダメだね」

「よく、こんな大穴を空ける落雷にあつたのに無事だつたね君」

「なははー……昔から悪運だけは強いんですよ……」

隼人は、自分で言つて悲しくなる嘘だと思つていた。そもそも

運が良ければ部屋の天井に大穴など空く訳が無いのだ。

「君は運が良いね」

「あはは……ありがとうございます」

「ここには、とても住めないねえ……新しい部屋を探してあげるから、明日まで我慢してね」

消防士の人が親切に、近くのコンビニで大きめのレジャーシートとビニールテープを買ってきて、天井の大穴を応急措置的に塞いだ上で撤収していった。大家さんもそれを見送ると、そのまま自宅へと戻つて行つた。

隼人は部屋に戻ると、押し入れに無理矢理押し込める形になつてしまつたことを謝る為に押し入れの扉を開けた。すると、丸くなつて眠るリーナの姿があつた。

両親が死んでから、ずっと一人で生活をしてきた隼人は、誰かと過ごす夜に少しの安息を感じるのだった。

第3話 幸せの笑顔へ Happy Smileへ

「ええ……はい……すいません。ご迷惑をお掛けします」

隼人は時代に取り残されたように佇む近くの公園にある電話ボックスで、バイト先に急遽休みを入れてもらう為の電話をかけていた。すでにバイト先では住んでいたアパートに落雷があつた事が噂として聞こえていたらしく、電話をした瞬間にバイトを休むことが予想出来ていたような対応だった。既に代わりに入ってくれるバイトを見つけていた準備の良い店長は、快く休むことを了承してくれた。

確かに落雷があつた部屋を引き払って別の部屋にいく必要もあるが、それより何より新たな同居人に對して社会のルールを教えてやる必要がある。それは実地も含めた極めて難易度の高い教育である。それを思うと、すでに抱えた案件が自分のキャパシティを遥かに凌駕していることに溜め息も出るが、気落ちしていくも事態が好転する訳でも無い。持ち前の明るさなど持ち合わせていかつたが、経験から来るあきらめと割り切りによつて気持ちを切り替える技術を隼人は習得していた。

「さてと……まずは新たな同居人に必要最低限の知識を与えてやる必要があるな……」

あまりに使われない為か、開きの悪くなつた電話ボックスの扉を半ば強引に開けると社会の常識を享受すべく自宅への帰路に着くのだった。

と言つても近くの公園のある電話ボックスを使用した為、実際五分も歩けば自宅に到着することができる。帰宅途中、隼人が空にはためくブルーシートに目を奪われた。少し離れたところからだからこそ見える自宅の屋根に張られたブルーシート。なんとも色々な

感情を豊かにさせてくれる気がした。もちろん悪い意味で。

せつかく持ち上げた気持ちも、実害を自分の目で確認した後では心情株価ストップ安も更新と言つ物だ。

重い溜め息をつきながらカンカンと音を立てて登る少し赤茶けた鉄製の階段は、もうしわけ程度にポリカーボネイトで出来た屋根が付けられているが、先日の雷を伴う嵐の影響で元々雨風で脆くなつていた所為もあつてか、その姿は一風前の灯『ふうぜん』のともしひである。まるで、自分のことのようだと考えた隼人は一層項垂れた様子で自宅のドアノブを捻るのだった。

隼人が部屋を開けた時間は、ほんの一〇分程度である。しかし、その短時間で部屋の様相は全く別の物に変化していた。板張りの台所は見たこともない金属に変わり、見たことも無い電飾の様な物でチカチカと光っている。畳が六枚引いてあつた部屋も、これまた見たことも無い材質で出来た床材に変更されていて当然のように所々チカチカと光っている。

開いた口が塞がらない。まさにそれを体現したかのように動きを止めた隼人は、冷静になる為に部屋の外にもう一度出ることにした。静かに後ろ手で扉を閉めると、悪いことをして閉め出された子供のように部屋の扉の前で蹲つた。

「え……つと? 今の光景はなんだ? 部屋が別の世界になつていったよくな……そう、まるで未来のような……未来のような! ! !

飛び出す様に跳ね起きた隼人は、扉を壊さんばかりの勢いで開けると、未来的な部屋の中に転がり込んだ。部屋の雰囲気が違う為か、はたまた別の理由なのか中の空間も若干本来の物より広く感じられる。隼人は目的の人物をそれこそ目を皿のようにして探した。そして、それは本来押し入れがあつたであろう場所で、鼻歌を歌いながらどこから出したのか料理道具の様な物で料理をしている。見たこともない食材を使って……蒼い色に紫の斑点が色鮮やかな触角が生

えた力エルの様なもの、とげとげした見た目とは裏腹に柔らかそうな質感の何か、脈動を続ける縁の何か、一見スイカに見えるが何故か人間の様な手足が生えた何か。それらに料理機材なのかレーザー銃のような物で切つたり、焼いたりしている。気のせいか小さく悲鳴のような物が聞こえるし、『助けて』と何故か日本語で認識出来る言葉まで出ていたような気がする。しきりに飛び散る何かの体液なのか果汁なのか、理解出来ない隼人からすれば悪魔召喚の儀式でも見た方がよっぽど精神衛生上宜しいであろう物を見ている認識があつた。不意に隼人の存在に気付いたリーナが頬に紫の汁を滴らせながらニコヤかな笑みを浮かべて振り向いた。それを見た隼人が『ひつ！』と小さな悲鳴を上げたのは無理も無いことだ。

「あつ！ 隼人さん！ お帰りになられたんですね！ 思ったよりお早い御帰りだつたので、まだ朝食の準備が出来て無いんですよ……サッサと片づけちゃいますから座つて待つて下さいね！」

サッサと片付ける為に作業スピードを上げるリーナ、そしてそれに伴つて聞こえてくるこの世の物とは思えない効果音と悲鳴のような物。隼人は精魂尽き果てた様子で、どこから出したのか分からぬ椅子とテーブルのような物の席に着くと、部屋に入つた時の元気はどこに言ったのか意氣消沈した様子でリーナが席に着くのを待つていた。

料理が終わつたのか、どう調理したらそうなるのか理解出来ないが隼人の生活の上で美的感覚的にも大変美味しそうな見た目の豪華な料理が並んでいた。どこをどう見ても蒼い色に紫の斑点が色鮮やかな触角が生えた力エルの様なもの、とげとげした見た目とは裏腹に柔らかそうな質感の何かとか、脈動を続ける縁の何かとか、一見スイカに見えるが何故か人間の様な手足が生えた何かとかは見受けられない。

「あ、あの食材でコレを作ったのか？」

「はい！ 腕によりを掛けて作りましたよ！ 栄養も満点だし！」

「ただ朝食には少し多かつたかもしませんね。張り切り過ぎてしましました！ テヘッ」

とりあえず、見た目こそちゃんとしていれば口を付けられるのが人間の凄いところだ。既に一〇時を回っていたこともあって、隼人は空腹のピークを迎えていた。恐る恐る一口食べてみる。味覚に対して過剰なまでのアピールだった。たった一口で口の中には唾液が溢れ『もつとくれ』と攻め立てる。あれほどゲテモノ宣しくな原材料を使っているにも関わらず、味付けは隼人の好みにベストマッチしているながらも初めて味わう味覚に、もはや隼人の手は止まらなかつた。朝食にしてはあまりにも多かつた料理だつたが、隼人は遂には完食し少し物足りないとさえ感じてしまう程だつた。

「はあ～……食つた食つた……」
「ちそつさま～つてカリーナ料理上手いのな！ 原材料見た時はこの世の終わりかと思ったぞ」「あの材料は”あちらの世界”から持ち込んだ物で、少し見た目は悪いですけど、とってもおいしいんですよ！ 隼人さんが気に入ってくれてよかつたです！」

胃を休めながら徐々に上がる血糖値によって、脳が活性化していく。そして、目の前に広がる異世界空間に意識が戻つて来たところで、隼人は改めてリーナに言つべきことを思い出していた。

「今すぐ部屋を戻せ！――」

が始まった。

リーナへの”じちらの世界”に関する一般常識のレクチャーは最低限の物を教え込むだけで夕方になってしまつ程の物だった。

「とりあえず、こんなところか……案外考えてみると教えなきゃいけない事って色々あるのな……」

「信号機は赤が止まれ、黄色が注意、緑が進め……基本的には隼人さんみたいに黒髪や茶髪が普通、瞳も同様……うう、色々あって大変ですぅ～……」

「まあ、最初は仕方ないだろうな、しばらくは出掛ける時は俺が一緒に出掛けてやるから、徐々に慣れれば良いよ」

「はい！ 隼人さん、ありがとうございます！」

リーナの真っ直ぐな瞳に少し照れる隼人。

「……そう言えば小さい頃から考えても、こんなに長い事異性と一緒に過ごしたことって無いよな……」

「？ 何か言いましたか？」

「な、なんでもない！」

隼人の慌てようにして小首を傾げながら、リーナは席を立った。

「ん？ どうしたんだ？」

「髪と瞳を隼人さんに合わせるんです。時間は短いんですけど八時間くらいなら隼人さんと同じような色合いで変更しておくことが出来ます」

リーナはそう言つと、その奥行きでどうやって入っていたのか疑問になるほど巨大な機械を取り出した。それに何やら入力のような物をしていくと機械が形状を変えて、昔の美容室にあつたパーマを

掛ける時に使う機械のよつた形状になつた。そして使い方もパーマをかける機械と同じなのか、機械の下に入り込むと上からリングのような物が降りて来てリーナの姿が、リングが通り過ぎたところから見る見る色を変えていく。銀色に近い程の白い髪の毛は栗色に近い茶色に、瞳の色も髪の毛と同様の色に変わつていた。

「どうでしようか？ 隼さんに大分近くなつたと思つのですけど……」

「そうだな、若干色素が薄い感じがするけど、肌の白さと合わせてみると特別辺でも無いから問題無いだろ？」

そう隼人が結論付けた瞬間、部屋のチャイムが来訪者を告げた。隼人は『よつこらせ』と年寄りくさい掛け声と共に立ちあがつて覗き穴から外を確認すると、来訪者は大家さんだつた。後ろを確認し、すでに機械を隠し終えているリーナを見て『しつかり常識を理解できているな』と確認を取ると、『は～い、今開けま～す』と返答して、部屋の扉を開けた。

大家さんの来訪理由は先日言つていた代わりの部屋の用意についてだつた。ちょうど、同じ一階にある角部屋の住人が引っ越したということで、そこを同じ家賃で使わせてくれるということだつた。隼人としても、天井に穴が開いたままで良いわけでもない。二つ返事で了承を返すと、すぐさま引っ越しとなつた。

「ん？ 隼くん、奥にいるの彼女かい？ キレイな子だねえ」「違いますよ。親戚の子が家出しちゃつたとかで転がりこんで來たんです。しばらく部屋に置いておくことになると思いますんで、紹介しますね。理奈！」

前もつて日本名を話し合いで決めておいたのが功を奏し、早速使う機会がやつてきた。リーナの伸ばし棒を取つてリナ、漢字を当て

て『理奈』である。親戚という設定にしておけば、名字も隼人と同じ『高橋』で済むのと、部屋に置いておくのに不自然で無い理由を得る為に調度良かつた。

「初めてまして大家さん。しばらくお世話になる予定の理奈です。宜しくお願ひします」

笑顔で挨拶し、ペコリと頭を下げるコーナーに、思わず目じりが下がる大家さん。

「そうかいそうかい。私は別に構わないよ。あまりうるさくして他の住人の方に迷惑さえかけなければ、何も問題なんてありませんからね。それじゃ隼人君、さっそく移動しようか。コレが部屋の鍵ね。この部屋は修理の為にしばらくは入れないようにしちゃうから忘れ物しないでね」

「何から何までありがとうございました」

隼人は丁寧に深々とお辞儀で返すと早速引越しの準備に取り掛かった。と言つても、基本的に荷物の少ない隼人の持ち物と言えば、大きめの風呂敷に全て収まってしまう位の物しか無かつた。唯一入らなかつた物がちゃぶ台と小さな冷蔵庫である。

それらを一纏めにすると今までお世話になった両お隣さんに挨拶をした。どちらも核家族の家が住んでいて、夏休みに突入した部屋の中は子供が散らかした玩具でごちゃごちゃしていた。どちらも奥さんが外出たが、リーナを見る度『彼女?』と聞かれるのだけはどうにかならない物かと隼人は思つていた。

リーナにも荷物を少し持つて貰い、新たな部屋へと向かう。もともと使つていた部屋より若干広い角部屋は変則的な七畳間だった。西日が入る窓があるのは少し残念だったが、前の部屋より環境的に良くなつたように感じていた。

少ない荷物をサッサと所定の位置に設置すると、お隣さんへの挨拶に出掛けた。普通であれば手土産の一つも持参するべきだろうが、引っ越ししてきた時も今も現在のお隣さんは留守にしていることが多く、まともに挨拶できたことも無い。奥様方の話によると夜のお店で働いている女性という噂だ。

隼人は『どうせ今日もいらないんだろうな』と思いながら扉に付いているチャイムを鳴らした。自分の部屋にもついている聞きなれたチャイム音が部屋の中で鳴つたことを確認すると、予想に反してパタパタと走つてくる音がした。『へえ～……珍しいこともあるもん。調度良かつたけど』と隼人が一人ごちていると扉が開けられた。そこには、『ばつちりメイクをした』これから仕事ですと言わんばかりの夜の蝶が一羽いた。

「？ お兄さん、何が用？」

見慣れない夜の世界の住人の雰囲気に飲まれていた隼人は、本人からの言葉で我に返ると軽く挨拶をした。

「この度、同じ階の部屋から隣の角部屋に越してきました高橋隼人です。色々どう迷惑をお掛けするかもしぬせんが、宜しくお願ひします」

お姉さんは隼人を上から下まで見ると『ああ～例の雷ボーアね』と呟いた。視線が動いたかと思えば、今度はニヤけている。隼人は既に同じ流れを三回も体験しているのだ。予想の範囲だった。

「隣にいる可愛い子は彼女？」

「違いますよ。親戚の子が家出しちゃったとかで転がりこんで来たんです。しばらく部屋に置いておくことになると思いますんで、紹介しますね。理奈です」

「初めましてお姉さん。理奈です。宜しくお願ひします」

笑顔で挨拶しペコリと頭を下げるリーナ。

「こちらこそ宜しけ。アタシつてば昼間は寝てるし、夜は仕事だから余り顔は合わせないけど、何かあつた時は宜しくね……つていけない！　もうこんな時間じゃん！　今日は少し早く入つて準備しなきやいけないのよ」……というわけで、またね！！！」

慌ただしく施錠して走つていくお姉さんは、駐輪場に原付を止めていたのか、ブイイーという音と共に走り去つて行つた。

「皆さん、とても良い人達ですね！」

「そうだな、隣のお姉さんは初めて会つたけど、美人だし悪い人じやなさそうだ。つと、もう外も暗くなつて來たな、朝は作つて貰つちゃつたし、冷蔵庫はまだ冷えないから食材使つちゃうか！　晩御飯はお礼に俺が作るよ」

「え！　良いんですか！？」“こちらの世界”の料理つて初めてですか！　楽しみい～

隼人は冷蔵庫に有つた食材を適当に組み合わせてオムライスを作つた。リーナはオムライスを気に入つたのか、口の周りにケチャップを付けながら凄い速さで平らげて行つた。

今まで一人で食べる晩御飯に慣れていたとは言え、誰かと食べる食事に心が温まつたように感じる隼人だつた。

第4話 携帯電話×For Contact

リーナがやつてきてから一日、小さなことから大きなことまで色々発生したが”こちらの世界”にリーナも徐々に慣れていった。まだ細かいところで危うい部分もある、髪と瞳の色を変化させる機械の効果も八時間程度という時間制限がある為、長時間の外出に懸念が残されている。短時間で思いつく限りの教育を施したとは言え、普段隼人自身が常識だと思っていることは意識して思い浮かべようと思つても中々難しいことであり、単純で言われば当然の様な事でも抜けてしまうことは数限りなく発生した。

しかしリーナの頑張りもあって隼人と暮らす部屋での生活には何ら問題が無い程度までの日常生活的知識は得られたようだつた。

さすがに何日もバイトを休んでいると、自分の生活も立ち行かなくなる。ただでさえ食事の量が二倍に増えているのだ。少し心配が残るがリーナを残して午後からのバイトに向かうことにした。

「リーナ良いか？ 誰かが家に来ても基本的には出なくて良いからな？」あと一人で出掛けるなよ！ リーナは大人しく家のことをすれば良いから。日が完全に落ちるまでには戻れると思つ、晩御飯は食べずに待つてくれ。絶対に火は使うなよ！」

「はい！ 分かりました！ リーナはお部屋の掃除とか、隼人さんがくれた本を読んで勉強しています！」

リーナが両手に抱える隼人が渡した本というのは、以前原付の免許を取る際に購入した学習本だ。自分の財産と言う物をあまり持たない隼人にとつて、ただの学習本であろうと捨てるのに躊躇われた為、なんとなく捨てられずに持つっていた物だった。学習本には交通マナーについて細かく記されていて”こちらの世界”をよく知らないリーナには打つて付けの教育本に思われた。

なんとなく後ろ髪を引かれる思いを残しながら、隼人はバイト先に向かう道を原付で走りだすのだった。

この原付は隼人にとっては初めて自分で購入した財産らしい財産だった。型落ちで中古だが少し前に人気があつた原付で、まだまだ現役で走れるというのに特価で販売されていたのだ。隼人は自分の不幸体質^{アンハッピー・アトラクタ}の性能を十分に理解していた為、中古なんて買った日にはその日の内にエンジントラブルに見舞われてスクラップ置き場に行くようと思われたが、新車で購入するようなお金も無いし結局新車で買つてもリコールにぶち当たるケースも有りうる。そう考えた時、中古原付でも現在問題が無いなら良いかと判断して購入した物だった。しかし、思いのほか何事も無く購入してから一ヶ月がたつたけど使用出来ている。

バイトに雇つてもらつてから初めての一連休取得、しかも突然である。事情を分かつて貰つてているとは言え、なんとなく気遅れする感が否めないものの一日ぶりのバイトに気合を入れる隼人だった。

「ふんふつふふ～ん！　ふつふふふ～ん！」

シャワー室から響いてくるどこかずれたリズムを刻んでるのはリーナが奏でる鼻歌である。リーナが平行世界にある自分の文化圏で流行つていた音楽を少し力の入つた鼻歌で奏でつつ、手に抱えた衣類をひっくり返していく。

「このドライつて書いてあるマークは洗濯機で洗っちゃダメってことですね！　こっちのマークはアイロンをかけちゃダメ……と」

すでに一人暮らしも長い隼人にとって家事の力量は同年代の男女と比較しても頭一つ抜きんでている。その隼人から事細かに指導を

受けたリーナの知識はすでに一般的な生活をすることにおいて抜かりの無い物となっていた。

「一つ一つ手で洗つて行くなんて、まるで石器時代にでも来た気分ですう~」

リーナが何気に失礼な感想を言いながら手早く洗濯を進めていると、甲高い音で部屋のチャイムが鳴った。集中力が高いリーナは、洗濯という作業に没頭していたせいで、出掛けに隼人が言つた言葉を失念していた。

「はあ~い！ 今開けます！」

扉に付けられたチョーンを外して外を確認すると、そこに立っていたのは昨夜挨拶を交わした隣のお姉さんだった。

「あれ？ 理奈ちゃんだけ？ 一人？」

「はい！ 隼人は仕事に行っちゃいました！」

「ふ~ん……そなんだ……」

隣に住むお姉さんの瞳があやしくキラリと光る。しかし、それに純粋なリーナはその瞳が表す小さな悪意に気付かない。

「じゃあ。お姉さんとお出掛けしない？」

お姉さんの提案に少し困った顔を浮かべるリーナ。隼人との約束を思い出し、誰かが来ても出るなど言われたことを思い出したのだ。しかし既に後の祭り、誰かが来ても出るなとは言われたが、一人で出掛けたと言っていたリーナは、お姉さんと一緒に問題無いと考え、提案を快諾するのだった。

「良いですよ！でも、どこに行くんですか？」

「んふつ。イ・イ・ト・ロ・ロー。」

お姉さんの運転する原付に道路交通法に違反する「一人乗りで向かつた先は、少し走ったところにあるショッピングモールだつた。部屋からまともに出たことのなかつたリーナにとつては”こちらの世界”で初めての外部との接触であり、不安が籠りつつも遙かに期待が勝り好奇心の溢れ出る視線で周囲を見渡していた。

「しつかし、もっと良い服は無かつたの？今着てるのサイズ合つて無いし、男物よね？」

「これは隼人さんのお洋服を貸して貰つてるんです。しつちに来たばかりで、ちゃんとした服持つてないですから」

「そんなことだらうと思つたよ。お姉さんに任しどきな！今朝パチンコで大勝しちゃつてパ～ツと使いたい気分なんだよね！」

運良く警察の視線にも止まらず一人を乗せた原付がショッピングモールに到着した。一輪車置き場にある鉄製のポールに原付を施錠するとモールの中に足を進めた。

「凄いです！凄いです！凄いです！！」

「あはは～。あんまハシャグんじゃないよ～危ないからね」

そんな二人が向かつたのはショッピングモールの中でも特に女性物のファッショントリックを取り扱う商店が軒を連ねるところだった。

「ここなら理奈ちゃんに似合う服もいっぱいあるだろうね」

「凄いです！初めてみる服がいっぱいです！お姉さん、ありが

とつゞいざこます！」

「あはは～、全然良いよ。それにお姉さんって、なんだか”こそばゆい”よ。私の名前は越長美由紀（こしながみゆき）つてんだ。あ～源氏名のホタルでも良いよ。好きに呼んで」

「ん～……ホタルさんつてキレイな名前ですね！　これからはお姉さんのこと、ホタルさんつて呼びますね！」

ホタルとリーナが手近な店から中に入ると、ホタルと店員によるリーナ着せ替えショーグ始まってしまった。

人形のように整った顔立ち、透き通るように白い肌と北欧人を思わせる栗色の髪と瞳、細いにも関わらず出るところは出ている反則的なポテンシャル、そしてそんなプロポーションにも関わらず日本人顔のしかも童顔である。まるでアニメの世界から飛び出してきたような見た目の持ち主に店員のテンションは最高潮に達し、お勧めの商品を持つた店員達が順番待ちをする状況になっていた。

「モテルじゃないんですか！？　こんな可愛い子この世に存在するんですか！？」

「私も初めて見た時は急いでて気付かなかつたけど……こりや予想以上だわ」

「うう～……なんだか恥ずかしいですぅ……」

いつの間にか店の前には人垣が出来ており、急遽、モールの一角に舞台と着替え用の天幕が用意され、ファッショントレーニングが行われることになっていた。悪乗りが大好きなホタルによって提案された規格だった。しかもモールの責任者が、これだけの集客力があるならと打算した結果、利あれど損は無しと判断され実現してしまったのだ。誰の提案なのかショップ対抗着せ替えバトルになり、ホタルの予算である一万円で可能なトータルコーディネイト勝負ということがなつていた。審査員は参加するショップ店長で、自分の店が提

案した物には点数が付けられないルールに決まった。

「続いてのコーディネイトは…」このモールでもゴスロリファッシヨンとして有名なブランド店！ ブラックレットドチヨリーさんのコーディネイトです！！ 全体的に赤のチェックで纏めつつ、黒で締める！ しかし、ところどころに使われるレースで出来たフリルが女の子らしさを引き立てております！」

続々と参加する店も増えていきモールの一角で始まったファッショングローは閉店近くまで続いていた。

「思ったより遅くなつちまつたなあ。リーナ腹減らしてるだろ？ なあ～。悪い事しちまつた」

夜八時も回ると街の長い夏と言えども、しつかりと夜になつている。申し訳程度に街灯が灯る道を迫る不幸に対処するため、鋭い視線で周囲を警戒しつつ隼人は家路を急いでいた。

「でも今日はハンバーグ弁当を一つもゲット出来たし、小さいのは沢山あつたけど大きな不幸もやってきてない。大分マシな一日だったな」

思い返してみればリーナがやつて来てからというもの、大きな不幸は訪れていないように思えた。それもリーナがやつってきたことによつて屋根に大穴が空くと言つ不幸は伴つたけど、部屋が角部屋に変わつたのは幸運とも言える。

「なんだかんだ言つて、リーナが来てから悪い事つて起きてないん

だよなあ。まあ、偶然なんだろうけどさつ…… 口に羽虫がっ！
やっぱり不幸は変わんねえな」

小さな不幸に見舞われつつも家に辿り着いた隼人は原付を厳重に施錠しながら自分の部屋に視線を投げて、ふとした違和感を感じた。

部屋の電気が点いていない。少し遅い昼寝でもしているのだろうか？ そんなことを考えながら軋む階段を上がり、部屋の前に辿り着いた時に違和感は最大の物となっていた。 鍵が開いてる。

隼人は勢いよく扉を開け放つと、すぐさま中を確認した。部屋が荒らされた様子は見受けられない。しかしリーナの姿が見つからない。狭い部屋の中に隠れられるようなところは多くない。押し入れやシャワー室を見ても見つからない。部屋が荒らされていないところを見ると、泥棒という線はかなり薄くなつたと思う。リーナのよう分からぬ機械は押し入れの中にあつた。つまり……

「リーナの奴！ 鍵も掛けずにどこに行つたんだ！」

それから三〇分ほど経つただろうか、遠くから近付いてくるブイーンという音がしたかと思うと、若い女性一人がハシャイでいるような声が聞こえてきた。

玄関から顔だけを出して外を確認すると、ブランド物を思わせる紙袋やいくつかのビニール袋を持つリーナと一度挨拶をしたことのある隣人のお姉さんだった。

隼人は靴を履くこともせずに外へ飛び出すとリーナを怒鳴りつけた。

「鍵も掛けずにどこに行つてたんだ！ 外には俺が許可するまで一人で出るなど言つただろう！？」

「ふえ！？」

いきなり怒鳴りつけられたりーナは一気に涙目に、それを隣で見ていたホタルが隼人に事情を説明し始めた。

「いや、そんな怒鳴らなくても……理奈ちゃんを連れ出したのは私なんだ。悪かつたよホント。こんな遅くなる予定じゃなかつたんだけどね」。あまりに理奈ちゃんが可愛いから店員さんが”返して”くれなくてさ。こんなボロアパートに泥棒なんて入らないし、鍵も別に良いかなあ～って、ハハツ」

「そういうことを言つてるんじゃないんです！ 理奈は外国暮らし
が長くて、この辺りのことや一般的な常識にも疎い部分があるんで
す！ 出掛けた先で何かあつたらどうするんだ！」

隼人の反論を聞いたホタルの目が据わる。

「アンタねえ……さつきから氣いてりやガタガタ煩い奴だよ！ アンタ、理奈ちゃんには年頃の女の子に必要な”色々な物”があるんだよ！ それなのに男物のサイズが合わない服着せてデリカシーの無い！ 必要以上の心配つてのは迷惑以外の何物でも無いんだよ！」

ホタルの言い分に”ぐう”の音も出ない。考えてみればリーナには『一人で出掛けるな』とは言つたけど『出かける時は俺とだけ』とは言つていない。誰かが訪ねてきても開けるなとは言つたけど、知り合いから声を掛けられれば無意識に対応してしまいそうな物だ。夏の間この部屋は人がいれば窓は全開で、玄関の近くにある台所の窓からは訪問者から内部は丸見えだ。

「大体ね！ そんなに心配なら携帯電話でも持たせてあげれば良いでしょ！？」

まさか、これが理由で携帯電話を所持することになるとは思つて

もみなかつた隼人だつた。

第 5 話 体調不良へ Deconditioning

隣のホタルさんの指摘も最もと感じた隼人は、少ない貯金から捻出して携帯電話を一台購入した。隼人が思つていたより月々の使用料金が安く済み、同一会社間であれば通話料金も掛からないという点が隼人の家計的にも大助かりだつた。

隼人は夏休み突入時に同じクラスの学年人氣で五本の指に入る上野菜緒えのなおから渡された携帯電話をすぐさま登録した。取得時の関係で登録番号の一番がリーナになつてしまつたことが悔やまれるが、二番目に輝く上野菜緒の名前に心がワクワクしていだ。

購入してから三日、未だに携帯を開いてはアドレス帳を見てニヤニヤしている隼人を見て、いつの間にか部屋に入り浸るようになつた隣人のホタルから辛辣な一言を受ける。

「隼人つてさー、キモイよね」

さすがに隼人も、この一言には”クル”物がある。そして、どういつわけか呼び捨てが定着してしまつていた。

しかし、そのまま黙つて攻撃を受け続ける隼人でもない。

「ホタルだつて人の事言えるのか？ 毎日、隣の男の家にばっかり入り浸つてさー。彼氏とかいないわけ？」

ホタルの額に青筋がえた気がした。そう、年頃の女性にはとてもデリケートな問題なのだ。高校生の隼人にとっては彼氏彼女がないという話題は、その辺に転がつてゐる石のようにありふれた物だが、”お年頃”の女性には竜の逆鱗のように触れてはならないタブー中のタブーなのだ。

「私だつてお店に出れば指名だつて入るのよ！　この前なんか金持ちの社長さんと同伴『ディナー』だつてしたんだからね！」

「そんなバー『チャル恋愛未満』のことで大きな顔すんなよ！　そして

未成年に夜の戯れ暴露してんじゃねえ！」

「同伴にはヤラしい意味なんて含まれてないわよ！」

「そんなの知るか！　それに夜の戯れにどんなヤラしい意味があんだけよ！　そういう風に思つてことは、そういうことをしてることじやないのかよ！？」

「してないわよ！」

「二人ともやめてください！」

最近ではリーナが仲裁に入ることが普通になつていった。隼人としても、こういう形は不本意ではあるが、隼人以外の人間と接することで社会への適応力を養えれば御の字である。

それにホタルと口喧嘩するのは、実はそんなに嫌でも無かつた。あまり他人と深く関わろうとする方では無い隼人だが、一人が好きな訳でも無い。色々事情があつて、普通の高校生活が送れていない隼人には、口喧嘩が出来るほど仲良くなつた友達がいなかつたからだ。もちろん学校生活をする上で支障が出ない程度の広く浅い付き合いはあるが、喧嘩をするほど仲良くは無い。ホタルのようにズケズケと言つてくれる人間は毛嫌いされがちだが、口は悪くてもどこか人を心配しているような説教癖があるだけなのだとも思つていた。仲裁に入ったリーナにホタルが『でもさあ～』とリーナに答えようとしたところで言葉がつまつた。隼人もどうしたのか？　と視線をリーナに向けると、どこか様子がおかしい。薄らと汗が滲み、色白で透き通るような肌が若干青ざめているように見える。

「アンタどうしたの！？　風邪？」

「えへへ、大丈夫です。少し休んでれば直りますから」

「風邪なら放つておいても大丈夫だろ。俺はそろそろバイトの時間

だから、暑いから少し辛いかもしれないけど暖かい格好して休んでろよ？」

「はい、隼人さん。お仕事頑張つて来て下さいね」

隼人はなんとなく後ろ髪が引かれるような気持ちがしたが、稼がないことには今の生活が維持できない。ましてや来月から携帯電話の料金も加わるのだ。隼人は気合を入れると、本日は休みだというホテルにリーナのことをお願いして、バイトへと出かけていくのだった。

「おかしい……」

隼人が大きな違和感を覚えたのは、時計の針が昼を回つて三時の休憩時間だった。いつもならキレイにされた厨房のどこから侵入したのか、ネズミに荒らされる惣菜も今日は無傷だ。昼の忙しい時間帯に店の中へ飛び込んでくるスズメバチも、今日は鳴りなを潜ひそめている。そもそも厨房に飛び込んでくるカラスが店先の電信柱に停まる時間帯にも関わらず、影も形も見えない。つい最近同じように平和な一日が過ぎるのかと思えば、大きなしつべ返しを食らつた覚えのある隼人としては、むしろカラスに厨房へ飛び込んできてほしい複雑な心境だった。

「こまま何も起きなかつたら……今度こそ俺の頭に雷が落ちるかもしれない……もしかしたら隕石かも……」

休憩時間は三〇分ある。この間に昼に食べ損ねた賄まかないを食べていた。どういう訳か、今日の賄は隼人が大好きなビーフシチューだった。店長曰く『来月から出そうか考えている新メニュー』らしい。店長

はこんな不幸の塊かたまりである隼人を雇つてくれるような気さくで大雑把な人だが、料理の腕は相当の物だ。そんな店長がどういう訳か、新作メニューに隼人の大好物を加えようというのである。隼人にとっては盆と正月がいつぶんに来たような幸せだった。しかし幸せだからこそ、この後が怖い。

なんとなくロツカーに入れてある携帯電話が気になつた隼人は、ロツカーへと足を進めた。今まで携帯電話を持っていたことが無い隼人は、普段から気にするという習慣が身についていなかつたため、休憩に入ると同時に携帯電話を開くような現代っ子とは少し価値觀が違う感性を持つていた。だから、気付くのが遅れた。携帯電話を開くと同時に驚くほどの回数、履歴に保存できる三〇件を全て埋め尽くすリーナからの着信に隼人は背中を伝う嫌な汗を感じていた。すぐさま慣れない手つきながらも、出来るだけ早くリーナへと携帯から電話を掛ける。隼人とリーナは、お互いに携帯電話の機能に通話以外の関心が無かつたから、呼出音は無機質な電子音だ。一定のリズムを刻む音が、焦る隼人の気持ちとは裏腹に悠長に聞こえてイライラが募る。

一二度の「ホールで携帯電話の呼出音が止む、隼人は誰とも確認せず声を発していた。

「リーナ!? どうした!? 何かあつたのか!?

「何? アンタ達、二人でいる時は『リーナ』って呼んでるの?

つてか隼人! 今すぐ帰つてきな! 理奈ちゃん倒れちゃつたのよ!

! 病院行こうつて言つても『絶対ダメ』って言つし、私どうしたら良いか分からぬよ!…」

電話口に出たホタルの声に数瞬面喰つた隼人だったが、すぐに気を通り直すとリーナの状態を確かめる。

「理奈はどういう状況なんですか!? 热があるとか、頭が痛いと

か！！

「え……つと、熱は無いみたい！ 頭も痛くないって！！ だけど、

凄い汗なの！ 顔色も凄く悪いし！ 何か特別な病気とか持つてないの！？ 親戚なんでしょう？ 何か知らない！？」

「俺は何も聞かされてません。とりあえず店長に聞いて、早退できるか掛け合つてみます！ ホタルさん、悪いんだけど理奈にどうすれば良いか聞いて出来る限りの対処をしてあげて！」

「わかつた。何ができるか分からぬけど、やつてみる！」

それからの隼人の行動は早かつた。電話を切るとすぐに厨房へ飛んでいき、店長に事情を話す。大雑把な店長は『良いぞ！ すぐ行つてやれ！ ここは何とかしとく』と二つ返事で許可が出た。コツク着を脱ぎ捨てクリーニング業者指定の籠に放り込むと、私服に着替えて原付に飛び乗つた。

普段、原付を大事に扱う隼人にしては粗雑に見える扱いだった。

「俺の不^{アンハッピー}幸体質^{アトラクター}が呼びよせたんなら、リーナじゃなくて俺に来いよ！ このままリーナに何かあつたら！ 両親も俺が殺したことになつちまう…」

隼人の焦りに答えるように高らかに甲高いエンジン音を立て走る原付は、法定速度を守る気は微塵も感じさせない走りで自宅への道を走り抜ける。平行世界から來たりーナは、医者に見せることが出来ない。基本的な構造はきっと同じだと思われたが、戸籍の無いリーナを医者に連れていふことは出来なかつた。自分がリーナのところへ行けばどうにかなるなんて、思えないけど何か出来ることはあるはずだ。そう信じて隼人はリーナの元に急ぐ。

たつた一五分ほどの道程^{みちのり}が、隼人には数時間にも感じるほど家への道が遠く感じられていた。やつと到着した古アパートの駐輪場にぶつけるように原付を止めると、施錠もそこに軋む階段を駆け

上がる。

一番角の自分の部屋の前まで辿り着いた隼人は、扉を壊さんばかりの勢いで扉を開け放つた。

「リーナ！」

隼人の呼び掛けに答えたのはホタルだった。

「遅い！ 何度も電話したのに！」

「ゴメン！ リーナは！？」

隼人の問いかけにホタルは視線を下げる。下がった視線の先には布団に横たわるリーナの姿があつた。

もともと色素の薄い肌は、より一層その存在感を希薄にし、まるで虚空にリーナが消えて行ってしまうのではないかと思われるほどだ。

酷い汗で髪が頬に張り付き、青褪めた肌が体調の悪さを物語つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2605ba/>

DNA

2012年1月10日17時54分発行